

## デンタルX線写真で観られた静脈石の一症例について

内田啓一, 馬瀬直通, 和田ゆかり, 長内 剛, 和田卓郎

松本歯科大学 歯科放射線学講座 (主任 和田卓郎 教授)

児玉健三, 深澤常克

松本歯科大学病院 歯科放射線科 (科長 和田卓郎 教授)

静脈石は血管腫の随伴症状のひとつであり, また, 血管腫は頭頸部が好発部位とされている. 血管腫が静脈石を伴う頻度は比較的稀であるとされていたが, 近年では静脈石を伴う血管腫の報告が数多くなされている.

静脈石の成因は, 血管腫内の循環血流の変化のために血栓が形成され, それか, さらに dystrophic calcification を起こし, 高度の石灰化をきたしたとする Ribbert の説が支持されている.

静脈石の診断には画像診断が最も有効であるが, 血管腫と臨床所見または画像診断において鑑別が問題になる疾患がいくつかある. 今回我々は, デンタルX線写真で観られた静脈石と鑑別を要する疾患について考察したので報告する.

画像所見: デンタルX線写真では (図-1 : a b c), 右下犬歯部近心側から右下第二大臼歯相当部付近にかけて類円形の9個のX線不透過像が認められる. 図-1 : a b に認められる3個の静脈石は下顎骨に重なっていないため頬側部に存在しているようにみられる. パノラマX線所見では (図-2), 右下側犬歯部近心側から右下第二大臼歯相当部付近にかけて類円形の5個のX線不透過像が認められるが明瞭には描出されていない. 図-1 : a b において頬側部に存在しているようにみられる静脈石は描出されていない.

X線写真読影上の注意点としては, 頸部軟組織に発生した血管腫では比較的明瞭に静脈石は描出されるが, 本症例のように下顎骨または下顎歯の

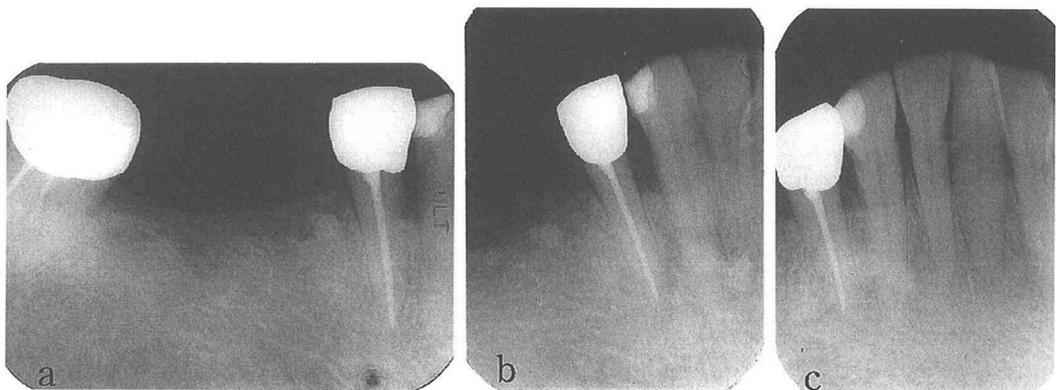


図1 : 3] 近心側から6] 相当部の下顎骨, 頬粘膜に重なるように類円形のX線不透過像が散在性に認められる.

a : 4] 遠心側下顎骨に重なるように認められる静脈石は歯根片のように認められる.

b c : 3] 4] の歯根部に重なるように認められる静脈石は硬化性骨炎のように認められる.

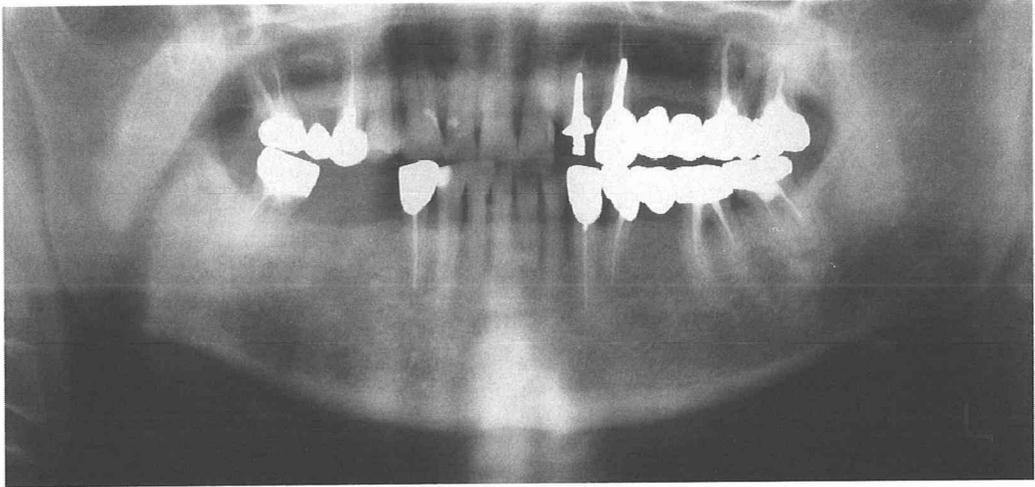


図2：パノラマX線検査では、下顎骨に静脈石が投影されると明瞭な描出は困難であると思われる。

根尖部上に静脈石が投影されると、歯根片、異物、唾石あるいは硬化性骨炎など見誤ったり、混同されることがあるので注意したい。また、特に日常臨床において鑑別が問題となるのは唾石症である。頬部に発生した血管腫は耳下腺の唾石症との鑑別、口腔底、顎下部では顎下腺唾石症との鑑別が問題となる。X線写真上では静脈石は多発性、散在性的の場合が多く類円形で層状構造を呈することが多く、唾石症は層状構造は稀であり、単発性が多い。

歯科口腔外科領域における石灰化病変の診断に

は、単純X線検査が重要な基本的検査法といえよう。また、超音波診断は石灰化、hypoechoic mass、周辺組織との癒着の程度などの画像情報を提供し、安全に行える検査であるので推奨すべき検査法であると思われる。また、CT検査においては、特に経血管造影検査は腫瘍の大きさ、血流の状態、石灰化の程度などを知るのには有用な検査である。しかしながら、今回の症例のように口腔領域にしかも限局した病巣の場合には、細部の描出に特徴のある口内法撮影法を十分に工夫し的確なX線撮影法を選択すべきであると思われる。